

湖水地方の詩学

——ガイドブックを中心にして——

中 島 俊 郎

ヴィクトリア朝の湖水地方ガイドブックは、ロマン主義的な感性を濃厚に揺曳しつつ、事実を基盤とする科学的な見方が確立されようとするエートスを時代背景にしている。ガイドブックにはそうした時代思潮が如実に反映されている一方、鉄道の出現、ツーリズムの隆盛、出版メディアの拡張、進展が前景として立ち上がり、前時代のツーリズムの諸相とは著しく異なる時代、文化趨勢をまず踏まえておきたい。

I 鉄道とツーリズム

鉄道網は1840年から70年までの間に24,000キロまで達し、高速化により主要各都市が結ばれるようになった。「鉄道時代」の到来である。鉄道とツーリズムの波は連動して押し寄せてきた。そして観光産業にいつそう拍車がかかっていく。

激化したツーリズムの様相は湖水地方に集約されていた。1853年、数ある『湖水地方図譜』のなかでもっとも傑作であるとうたわれたジェームズ・バーカー・パイン（1800-70）の『英国の湖水地方』がフォリオ判をうわまわる大判（71×53センチ）で出版され、そこには25葉の彩色されたリトグラフ作品が入っていた。詩人チャールズ・スウェインが説明文をそえているが、作品には詩想にそぐわないウィンダーミア駅の様相が提示されていた。駅にはツーリストが群がり、新型の蒸気機関車が黒煙を勇壮にはき出し、駅の外へ目をやると湖畔ではピクニックを楽しむ家族連れ、湖面ではレガッタにうち興じるツーリストの姿が点描されている。さらにジョージ・ブラッドショー（1801-53）が出した『鉄道駅案内』（1863年版）によると、ウィンダーミア駅では電報を打つことができ、何便も頻繁に供される至便な路線が敷設されている点が強調されている。そして、駅周辺に居住している著名人（『ブラックウッズ・マガジン』編集長クリストファー・ノースことウィルソン教授など）の紹介がなされている。つまり湖水地方は観光地のみならず、すでに住居地としても強く推奨されていたのであった。

II トマス・クックのツアー

トマス・クック（1808-92）が団体旅行を組織して旅を商品化する礎は、1851年の万国博覧会ツアーで強固なものになった。クックは、水晶宮へ165,000人も観光客をおくりこむ実務をうちたてたのである。クックには経営的な起動力があっただけではない。旅行者がもっとも望むところを何よりも熟知していたのである。ハイド・パークの万博会場になったクリスタルパレスは、熟練の造園技師ジョゼフ・パクストンの手になるものであったが、クックはパクストンと友人であり、パクストンはクックのツアーに多大な助力を与えた。両者に共通するのは自助の人であり、それゆえにともに時代の要請を受けとめる資質に富んでいた。クックがツーリズムを起こし、成功をおさめた陰には、こうした人脈の存在も忘れてはならないであろう。

万博周遊ツアーが成功するまでに、クックは旅の快適化をつねに目指してきた。たとえば当時、レスターからリヴァプールへ行くのにも異なる6社もの鉄道路線乗り継がねばならなかった。クックは交渉して一枚の切符で煩雑さを解消し、しかも値下げさせて旅の道中をより快適なものにし、クックの団体旅行は旅の助長をうながした。旅行者の側で旅行クラブが自発的に形成されて、旅行計画を練るようになったからである。1855年、最初のフランス・ツアーであるパリ万博見物が企画、実行されたが、それはロンドン万博の前例があったため、成功を約束されたのも同然であった。パリ万博ツアーには「ギロチン処刑見物」まで旅程に入っていたという。そしてクックも自前のガイドブックを多く出版していたのである。

III ツーリズムとガイドブック

1839年に刊行された最初の鉄道時刻表（*Railway Time Table and Assistant to Railway Travel*）は、鉄道による旅行を円滑に運ばせた。旅を支障なく遂行して

いくのに不可欠なインフラ作業は急速にすすんでいったのである。各路線ごとに切符を購入しなくてはならない煩雑さは1842年に解消された。各鉄道網を一括してとりまとめた切符を予約できる機関 (Railway Clearing House) が設置されたからである。トマス・クック社が自社の団体旅行を円滑に企画できたのもこの便宜があったから可能になったのであった。

1839年に最初の時刻表が刊行されたが、イギリス全土に時間意識の呪縛をかけたのはブラッドショーが発行した、月刊の『ブラッドショー鉄道時刻表ガイドブック』である。ガイドブックと銘うっているものの、内容は時刻表と地図がほとんどを占めていた。ブラッドショー自身、地図を作成する彫刻師であり、運河の航行表、案内書 (*Bradshaw's Maps of Island Navigation*, 1830) を印刷、出版していたのである。黄色の表紙につつまれたわずか32ページの小冊子は、43の鉄道路線を網羅し、1961年まで刊行されつづけた。雑誌『パンチ』はこの時刻表を「イギリス文学の最高傑作」と揶揄したが、それは地方路線にも目配りを忘れずに、無数ともいえる読者を獲得していたからにはかならない。

1830年代から鉄道ガイドブックは隆盛をきわめていくが、無味乾燥な事実の羅列に終始せず、鉄道路線周辺の地誌の特徴や歴史的建造物の紹介から地元産業はいうに及ばず特産品をも忘れずに列記し、最近起きた暴動などといった時事的出来事も記述していた。1835年にエドワード・パーソンズが刊行した『ツーリスト・コンパニオン』(*The Tourist's Companion or: The History of the Scenes and Places on the Route of the Rail-Road and Steam-Packet from Leeds and Selby to Hull*) などはこの好例である。

当然のことながら鉄道旅行の必携書も出版された。『鉄道旅行の備忘録』(*The Railway Traveller's Handy Book of Hints, Suggestions and Advice before the Journey, on the Journey and after the Journey*, 1862) は、路線案内にはじまり鉄道の旅に必要な携帯品から旅の注意まで、まさに旅の百科全書のような趣きにあふれている。

今日の目からすれば笑いを誘うが、1830年代の鉄道の出現以来、鉄道の旅には付随する旅行者の健康問題がたえず課題とされてきた。汽車がトンネルの中へ入り出ていく時、乗客の目は多大なる影響をこうむり、視力障害を及ぼすとか、切り立った崖を抜けるときには鼻やのどの粘膜に炎症が生じるとか云々されたわけである。鉄道が国民の足となっていた1868年になって、アルフレッド・ハヴィランドの警告の書 (*Hur-*

ried to Death: Or, A Few Words of Advice on the Dangers of Hurry and Excitement Especially Addressed to Railway Travellers) が出版されていたほどであった。

まずヴィクトリア朝のガイドブックを考えるうえで、その後のガイドブックを規定したジョン・マレイのハンドブック、カール・ベデカーのガイドブックを検討しておく必要がある。

IV マレイの『ハンドブック』

マレイの『ハンドブック』以前のガイドブックには情緒的色彩が色濃くとどまっていた。個人的な体験記が大半のようなガイドブックも少なくなかった。主観を前面に押し出した旅のスケッチ風な記述が多かったのである。だが、マレイの『ハンドブック』は主観が横溢する内容を一新し、かたくなまでに客観的であろうとした。個人的な意見を開陳すること、ましてや政治的信条、宗教的教義などを吐露することなどは厳に戒められた。押さえつけられた主観は、旅行者に有用な情報を記述する客観性にとって代わられたのであった。

ジョン・マレイ二世が採用した「ハンドブック」という名称と赤い表紙は、ガイドブックの代名詞になった。マレイの「ハンドブック」の出現により、ガイドブックの性質と内容は一変したのである。

旅行者に必要な情報——宿泊所、交通、換金、ヴィザ、パスポートなど——を欠かさず目的地の地図も挿入した。ガイドブックの実用性を達成するために、感情の発露を押さえた文体がガイドブック全体を統一していた。旅行の目的地ごとに章立てして目的地へ着くまでの道順がじつに詳しく、簡潔な語彙で記述されている。だが、ガイドにもられている考古学や名所旧跡の案内にはかなり高度で専門的な議論も展開されていた。そして、版型はあくまでも旅行者の携帯に資するため、ポケットに滑り込ませやすいサイズで造本されていたのである。

ジョン・マレイ三世が、1836年、最初のハンドブック (*A Handbook for Travelers on the Continent: Being a Guide through Holland, Belgium, Prussia, and Northern Germany, and along the Rhine, from Holland to Switzerland*) を出版した。このヨーロッパ旅行を対象としたガイドブックは、大好評のうちにむかえられた。マレイ三世は、自身がした旅行を体験にもとづき、1836年には北ヨーロッパ篇、1838年には南ドイツ篇を自分の手で書きあげた。1838年に出版したスイス編は、マレ

イ三世と有名なアルピニスト、ウィリアム・ブロケン
 ドンの共著であり、1892年には18版をも重ねる驚異的
 な売れ行きを示した。毎年のように出しつづけ、19世
 紀にはこのガイドブックは60以上もの世界各地を網羅
 した。また、イギリス国内についても1850年から1899
 年までかけて、全国各地のガイドブックを出版したの
 である。

V ベデカーのガイドブック

ジョン・マレイ社の『ハンドブック』とほぼ同時期
 (1832年)に出版されたのが『ベデカー・ガイドブック』
 であった。両書は出版者、出版社、そして書名が
 同義語となって流通するくらい大きな存在となり、ガ
 イドブックの双壁となっていったのである。以下に検
 討するガイドブックにはマレイとベデカーの影響が同
 時にみられることも興味深い。

当初、ベデカーのガイドブックは、マレイ・ハンド
 ブックとその一大特徴(番号によって目的地と目的地
 を結ぶ番号表示など)が酷似していたが、やがて独自
 の工夫をこらし、星印の数により、ホテルの信頼性、
 訪問する価値のある名所旧蹟を指示し短期滞在型旅行
 者の便に資したのである。重要性を星印で表示するベ
 デカー方式は以後のガイドブック作成に踏襲されるま
 だになった。そして注意すべきは、星印は旅の見巧者
 の視点からではなく、一般的なツーリストの目からみ
 た「平均的な」視線であることを看過してはならない
 であろう。

両ガイドブックには競合するような側面があったに
 せよ、ベデカーのガイドブックが独自性を出しはじめ
 たのは、1859年以後、英語版が出版された時からであ
 った。とりわけ1875年版『パレスチナとシリア』は、ベ
 デカー・ガイドブックのなかでも傑作で、1909年から
 1911年にかけて中近東にいたT. E. ロレンスはたえず
 携帯し参照している。そして第一次世界大戦中、英国
 陸軍省は、同ガイドを復刻して駐留する兵士たちに配
 布したほどであった。

では何がすぐれていたのか。それは一言でいえば簡
 潔きわまる文体にあった。「私の文体はミルトンとベ
 デカーからなる」と吐露したのは哲学者バートランド・
 ラッセルであった。さらにベデカーをベデカーたらし
 めた側面は正確さにあった。ただ不運なことにその正
 確さが災いしてしまった。1942年、ドイツ軍はイギ
 リス本土空襲にベデカーの「正確さ」を利用して、名所
 旧蹟を空爆した。「ベデカー爆撃」と呼ばれるゆえん

である。

簡潔にして正確さを獲得した文体は、ヴィクトリア
 朝からエドワード朝の文学者たちに影響を及ぼした。
 顕著な例としてE. M. フォスターをあげることができ
 よう。ベデカーが重要なテキスト機能を果たす『眺め
 のいい部屋』から、ベデカーの文体を巧みにパロディ
 してみせて人物造形をしていく『天使が踏むのおそ
 れるところ』まで、フォスターはじつにこのガイドブ
 ックを有機的に用いて作品世界を構築している。また、
 「ベデカーを携えたバーバンク、葉巻をくわえたブラ
 イシュタイン」というT. S. エリオットの佳品はベデ
 カーという暗喩なくしては成立しえない。ともあれベ
 デカーは1832年から1944年までに969冊の個別ガイ
 ドブックを出版し、そのうち英語版は266冊を占めてい
 たのである。

VI 鉄道と出版の連動

鉄道は高速化し、同時に乗客へ目的地到着するまで
 の間ゆとりある時間をあたえ、ゆっくり腰をおろして
 くつろぎ灯りのもとで本を読む時間をつくりだしたの
 である。旅の道中で初めて読書が可能になったわけ
 であった。必然的に鉄道の進出は携帯に便利で廉価本の
 供給をうながしたのである。鉄道の拡張と書籍販売網
 の拡大は並行していた。1848年、ユーストン駅に最初
 の書籍販売店を設置したW. H. スミスは、1860年代
 には主要駅ほとんどに自社の販売店を展開していた。
 当然ながらガイドブック、時刻表も店頭に並んでいた
 わけである。

大量需要に応じるため本は価格破壊をおこし、廉価
 本を出す出版社が多くできた。最右翼はジョージ・ルー
 トレッジ社で「鉄道文庫」を出版した。鉄道文庫は現
 代のペーパーバック革命の前兆として出版文化史のう
 えでも少なくない意味をもつ。ガイドブックの廉価版
 が導入されていく過程において鉄道文庫のもつ意義は
 大きい。

鉄道文庫の装幀は、派手な3色以上の色彩にいろど
 られたダンボール紙に表紙があしらわれていた。そこ
 から黄表紙と呼称され、いささか安易で安直な感が否
 めないが、選定されているタイトルをみると読者大衆
 が何を求めているのかがよく理解される。発売された
 最初の10作品のうち、6作品までもがアメリカ人作家
 J. F. クーパーの作品が採択され、第8番目にJ. オー
 スティンの『分別と多感』(1849年8月)、そして第10
 番目に同じく『自負と偏見』(1849年10月)が入って

いる。

鉄道文庫は小説ばかりを出していたのではない。1850年頃、ルートレッジ社は「ポピュラー・ライブラリー」シリーズを出版し、ノンフィクションの作品を数多く入れた。W. アーヴィング『ゴールドスミス伝』、『マホメット伝』、R. W. エマソン『代表的英国人』、そしてH. メルヴィール『タイピー』、『オモロー』などが最初の5作品のなかに加わっていた。さて、ここで代表的なガイドブックの特徴を検討しておこう。

Ⅶ ガイドブックの諸相

『ブラックのガイドブック』

Black's Picturesque Guide to the English Lakes (Adam & Charles Black, [1841] 1865)

ヴィクトリア朝のガイドブックには情感的な側面と科学的な側面が混在していた。湖水地方ガイドブックに科学的記述をもちこみ客観的内容を織りこもうとしたのは、ジョナサン・オットリー (1766-1856) の『湖水地方解説』(*A Concise Description of the English Lakes, the Mountains in their Vicinity, and the Roads by Which They May Be Visited; with Remarks on the Mineralogy and Geology of the District*, 1823) を嚆矢とする。オットリーはケズウィックの住人で、大衆向け科学(popular science)に興味をいだき、原子理論で有名なジョン・ドールトン、地質学者アダム・シジウィックなどを湖水地方へ親しく案内した体験から、さらに科学的探究心を深めていった。その「序文」のなかで、従来の湖水地方ガイドは風景美のみを説くばかりで、科学的観察をおこなっていると非難した。その結果、オットリーは自らのガイドブックに鉱物学、地理学、気象学の見地をおりこみ、山岳、丘陵の高低、湖の幅などを計測し、数値化してみせた。ポピュラーサイエンスの知がガイドブックにより客観的なデータをもたらすようになり、ヴィクトリア朝ガイドブックの一大特徴になっていった。

ブラック社はガイドブックをもっとも早い時期から出版していた。有名なマレイ社版海外旅行のハンドブックよりも10年早く、その国内旅行版ハンドブックよりも20年も以前の1826年からガイドブック『スコットランド』(*Black's Economical Tourist of Scotland*) を出版していたのである。とりわけブラック社の「ピクチャレスク・シリーズ」ガイドブック(*Black's Picturesque Tourist and Railway Guide*) は価格が安い点でも人気

があった。19世紀半ば、マレイ版『ハンドブック』の価格は農夫の一週間分の賃金に相当していたのに比較して、ブラック版ガイドブックは手ごろであった、とはいえ、情報の質・量が劣るわけではなかった。

アダム・ブラック (1784-1874) が起こしたこの出版社は、エジンバラに拠点をおき、『エンサイクロペディア・ブリタニカ』などの版權を有し、盤石な資本力のもと、ガイドブックを陸続と出版し、老舗ジョン・マレイ社が出版しガイドブックの代名詞ともなった『ハンドブック』に迫る勢いがあった。まず『エジンバラ』、『グラスゴー』を1839年に出版したのを手始めに、1841年に『湖水地方』を、そして1843年には、『イングランド、ウェールズ』という英国全土規模のガイドブックを出した。

ブラック社のガイドブックは、英国の各地、各州の単位で編集したところに特徴があった。1854年、『アバディーン』、『ベルファースト』、『ダブリン』、『アイルランド』、『ハンプシャー』、1857年、『ノース・ウェールズ』、『ウォーウィックシャー』、1858年、『ヨークシャー』、1806年、『グロスターシャー』、『ケント』、1861年、『サリー』、1865年、『チャネル諸島』、1866年、『ブライトン』、1868年、『リーズ』、『マンチェスター』、『スカラボー』など英国全土をくまなく網羅して、1868年には『ノールウェイ』、『パリ』、そして1869年、『イタリア』、1877年『スイス』、『ライン河周辺』などの外国旅行ガイドブックを多く出版していった。

ガイドブックの出版市場は熾烈をきわめていた。情報の正確さ、最新性は言うまでもない必要条件であったが、視覚に訴える挿絵の重要性は「数」よりも「質」にあったと言えよう。旅行をするという特権は、良質で見ええるガイドブックを所有するという優越感でもって代償されたからである。

ブラック社版『湖水地方ガイドブック』を執筆したのはジョン・フィリップス (John Phillips, 1800-74) である。フィリップスはロンドン大学地質学教授で、1854年から1870年までオックスフォード大学のアシュモリアン美術館長の職にあった人物であった。ブラック版ガイドブックは情感的な面で旅行者の満足感をうながすと同時に、科学的知見に裏づけされた記述でも群を抜いていた。ワーズワスの有名な湖水地方ガイドブックもその詩的情操感だけで読者の支持をえていたわけではない。ケンブリッジ大学地質学教授アダム・シジウィック (1785-1873) から科学的知見を援用していたのである。

ブラック版ガイドブックは、旅行者の携帯にたえる

ように堅固な造本で定評があった。そしてヴィクトリア朝が誇る第一線級の芸術家たちを総動員して製作にあたらせていた。ここで言及している1865年版は、挿絵をマイルズ・バーケット・フォスター (Myles Birket Foster, 1825-99) にゆだね、彫刻はエドモンド・エヴァンズ (Edmund Evans, 1826-1905) の手になる。そして表紙には有名なブックバインダー、ジョン・レイトン (John Leighton, 1845-1902) の金文字と金箔をあしらった意匠からなる、とえばヴィクトリア朝の代表的なブックデザイナーたちを総動員していることが明瞭であろう。

『フォードのガイドブック』

William Ford, *A Description of the Scenery of the Lake District* (R. Croombridge & Sons, [1839] 1852)

さて、次の特徴である湖水地方の精神的な支柱となったワーズワスの存在を検討していこう。フォードのガイドブックには冒頭からワーズワス『逍遙』からの一句が引用され、全篇をつうじて少なからぬワーズワス詩句の引用に驚かされるほどである。

ワーズワスは幼年時代を湖水地方の自然のなかで過ごし、1790年代にふたたびこの聖なる地へもどってきた。1800年に発表された“The Brothers, a Pastoral Poem”の冒頭 (“These Tourists, Heaven preserve us! needs must live/A profitable life...”) をみれば、ワーズワスがツーリズムによる旅の商業化にもっとも嫌悪を感じていたかが理解できる。当然のことながら、1810年に出版された『湖水地方ガイドブック』は、彼の願いにほかならなかった。

ただワーズワスの『湖水地方ガイドブック』は、初めこそ地元の素人画家 (ジョゼフ・ウィルキンソン) の作品への「序文」として書かれたものにすぎなかったのだが、ワーズワスは1820年に独立したかたちでこの『ガイドブック』を増補し、出版した。その後、1822年、1823年、1835年と順調に版を重ねていき、1840年代から1860年代にかけて起きた湖水地方ツーリズムの「聖典」となっていく。

ワーズワス以前の詩人たちは湖水地方を、文学的情感のなかでピクチャレスクという美意識を高揚させる場として湖水地方に地霊をみとめ歴史の<相/層>のもとで理解しようとした。ワーズワスはクロードグラスという人工の目でもってしか自然を鑑賞しえないピクチャレスク・ツーリストたちを拒否し、みずからの『ガイドブック』を、自己の裸眼で、自からの魂に照

らして湖水地方の自然美を体得しようとする人々にむけて発信したのであった。

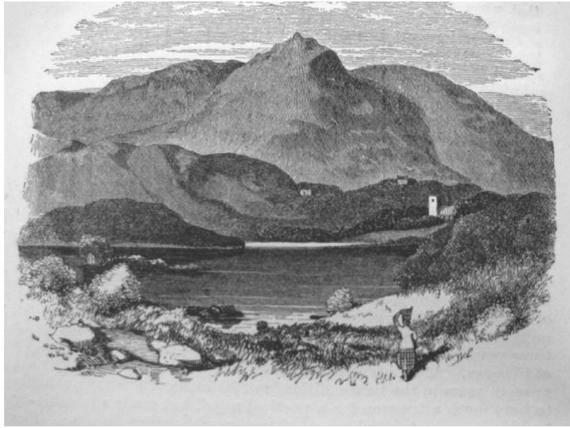
ただ問題は、ワーズワスが願ったような「趣味ゆたかな」人々は往々にして富裕層に限定され、ワーズワスの精神性に追従したいがために湖水地方周辺で暮しはじめたのである。これはワーズワスにとって大いなる誤算であったにちがいない。この地にそぐわない家屋が建造されていき、湖畔に護岸堤が曲線をなし、湖水地方には生息しない外来植物で庭を埋めようとする都会からの闖入者たちがもたらした惨状を目の当たりにしたとき、さすがにワーズワスも精神性が現実生活の場ではいかに脆弱であるかを思い知ったはずである。

さらに皮肉なことに、群れなすツーリストを聖地へ呼び込んでしまったのはワーズワス自身であった。

まずワーズワス自身が地の言壺ことばであった事実に注目しておこう。1770年4月7日にコッカーマスに生まれたワーズワスは、ペンリスの小学校で学び (1776-7年)、ホークスベッドのグラマー・スクールへ入学し (1779年)、再びペンリスで長い休暇を過ごし (1789年)、度々、湖水地方を訪れ (1794年)、コールリッジたちとウォーキングツアーを試み (1799年)、グラスミア湖畔のダヴ・コテッジに居住し (1799年12月20日)、畢生の『プレリュード』を完成させ (1805年)、アラン・バンクへ移り (1808年) さらにグラスミアへ移動し (1811年)、そしてライダル・マウントを終の棲家とし (1813年)、逝去してグラスミア教会墓地に埋葬されたのであった (1850年4月23日)。この遍歴をみてもワーズワスがいかに湖水地方と一体化した存在であったかよく理解できよう。

同時にその詩作品の大部分が湖水地方から生み出されたことを忘れてはならない。それゆえ、1830年代にはすでにワーズワスの住居はツーリストたちが押しかける「聖地」へと変貌をとげていた。「夫との時間のもてるのは朝食のときしかない」とワーズワスの妻が嘆いたのもこの頃のことである。ワーズワスの自宅へ押しよせる旅行者は詩人の私生活の自由などまったく眼中にはなく、1830年から37年にかけて2,500名もの訪問客がワーズワス家の来訪者名簿に名をつらねている。1895年に発行されたアメリカの雑誌『アトランティック・マンスリー』は、湖水地方を「ワーズワス・カン トリー」と名づけていて、それは同時にアメリカ人観光客の増大を物語っていた。

文学巡礼という、ヴィクトリア朝において隆盛をきわめた一種のツーリズムがあった。英国詩人などの生家や作品ゆかりの地を訪ね、詩想にふけるわけである。



図版1 W. ホワイトット『英国詩人の住居と遺影』
(1866年)挿絵図版

そうした文学巡礼に人々をかりたてた作品にウィリアム・ホワイトット (1792-1879) の著述 (*Homes and Haunts of the British Poets*, 1847) がかなりの影響力をもっていた。[図版1] そのワーズワスの章は、「1850年4月23日、詩人ワーズワスは80歳で逝去した。それははからずもシェークスピアの没した日と同じであった」という一文で閉じられている。ホワイトットがワーズワスとシェークスピアの没した日をあえて重ねているのはじつに意味深い。と言うのも1890年、詩人・批評家 S. A. ブルックはワーズワスの旧居ダヴ・コテージを、シェークスピアの生誕地にある生家を模倣してワーズワス博物館として開放し、文字通り世界中から訪問客をむかえるようになったからである。

ロマン派詩人ではあったが、ある意味でワーズワスはヴィクトリア朝詩人でもあった。それは1842年から1850年まで桂冠詩人として君臨していただけでなく現役詩人として活動していたからである。すでに1842年、すぐれたワーズワス選集を編集したマシュー・アーノルドは、「イギリスにおけるワーズワスの名声は確立している」と指摘している。そしてワーズワス自身、新しい詩篇を書きつづけ自作の推敲に余念がなかった。

ワーズワスの伝記を書いたウィリアム・ナイトを中心として、1880年に設立されたワーズワス協会は、アンソロジー、選集、書簡集、伝記そして協会紀要などを出版し、ワーズワスを「制度化」し、〈イングリッシュネス〉そのものへと顕彰することに成功したのであった。

こうした推移につれて、ワーズワスの影響力は無視できないほど肥大化していったのは当然の帰結であった。その感化力は文学界だけにとどまらず、社会現象にまで増幅したのである。ワーズワス作品はヴィクトリア朝社会の道徳的規範となり、疑似宗教にも比す存

在になりえたのであった。それは単なる文学作品としてあがめられたのではなく、人生の指針を与えるいわば聖書にも似た地位を獲得していた。その詩篇は、職種、階層を横断して深い影響力を世に浸透させていった。だからワーズワス協会の設立者にラスキン、ブラウニングといった文人から、哲学者、宗教家、教育者、科学者、政治家までもが名前を連ねていたとしても何ら驚くにあたらないであろう。精神的危機に陥り、ワーズワスの詩にふれて窮地を回避した J. S. ミルの「体験」は、けっしてミル自身の身のうえだけに起きた事件ではなかったのである。こうしたワーズワスの精神的支柱は視覚媒体を通して浸透していくことになる。

『ウィルモットのガイドブック』

Robert Willmott ed., *Our English Lakes, Mountains, and Waterfalls as Seen by William Wordsworth* (A. W. Bennett, 1864)

湖水地方ガイドブックに写真図版が初めて挿入されて出版されたのは1864年の本書『ウィリアム・ワーズワスの湖水地方』であった。湖水地方の詩神ともいえるワーズワス精神が柱となって本書を支えている。詩人生誕の地コッカマス、幼少期に通学した学舎ホワイトヘッド・グラマースクール、妹ドロシーとともに散策し詩作にふけたグラスミアの丘や湖、ダヴ・コテージ、ライダル湖とグラスミア湖を同時に見おろすライダル・マウント邸と庭など、ワーズワスの詩想を想起させる写真と並行してワーズワスの代表的な詩作品を掲げ、この案内書は構成されている。たとえば最後のページにはワーズワスの墓石がうつし出され、有名な詩「霊魂不滅」の絶唱（生きるよすがなる人の心/ 優しさ、歓び、怯えによって/ つつましく咲く花さえも/ 涙よりも深く底知れぬ感動をもたらす）が横にそえられるという具合である。

言うまでもなく、詩句と写真図版が相乗効果を与えて、感動を立体的に醸成していく。本ガイドブックは視覚媒体を求めるツーリストの希望に応え、1867年に再版、翌年すぐに第三版を重ね、さらに1870年に第四版が出るほど需要があった。

ただここで注意しなくてはならないのは、挿入されている「写真」について、である。撮影した写真をページのなかに印刷するのではなく、あえてページに貼りつけている。アルバム仕立てのようにことさら立体感を出そうとする意図を感じさせる。これらの写真にはステレオスコープ写真が用いられた。撮影者はトマス・

オーグルで、他にもこの種のガイドブックを手がけて、ウォルター・スコット『湖上の麗人』を本書と同じような体裁で出版している。

ステレオスコープ写真

ここでステレオスコープ写真について説明しておきたい。かつて湖水地方を巡る旅人は「クロードグラス」を持参しピクチャレスク美を鑑賞した。ステレオスコープ写真こそヴィクトリア朝のクロードグラスなのである。ピクチャレスクという美意識はこのようなかたちで顕在化していたのであった。

ステレオスコープ写真は、固定された画像が遠近感をもって浮き上がるように見え、平面的な写真とは異なり三次元的世界を提供してくれる。こうしたステレオスコープ写真の原理は、すでにレオナルド・ダ・ヴィンチが『ミラノ手稿』（1484）のなかで図示し解説している。肉眼によってわずかに異なって眼がとらえた像を頭脳のなかで修正し統一する、といった視覚の復元原理は早くから理解されていたわけである。

ヴィクトリア朝イギリスでは1838年、生理学者チャールズ・フィーストン教授が論文「視覚の生理機能」を王立協会に提出し、ステレオスコープ写真の機能を説明した。ただ惜しむらくはフィーストンの原理は実用的な写真撮影を可能にするまでにはいたらなかったのである。

1851年、万国博覧会にて、写真の創始者タルボットの友人であったスコットランドの物理学者サー・デイヴィッド・ブルースターは万華鏡の開発者でもあり、『ステレオスコープ——歴史、理論、構成』（1856）という著作までであるが、双眼鏡型のステレオスコープを出品し、ヴィクトリア女王を感激させた。同じ博覧会にてパリの写真技師ジュール・デュボスクは美しい写真もそえて、ステレオスコープ写真機を女王に献上している。女王が感嘆の声をあげたのは言うまでもない。

ステレオスコープ写真は、写真撮影に一大変革をもたらした。「一大変革」というのは、撮影者に構図をそれほど考慮させずに撮影を可能にし、写真を見る者には、写しだされたときに生じる距離感と被写体の輪郭を鮮明に浮きあがらせたからであった。万国博覧会で一大成功をおさめたデュボスクのもとへは注文が殺到し、わずか三ヶ月の短期間のうちにパリとロンドンで25万枚ものステレオスコープ写真を売り切ったのであった。以後、旅行にステレオスコープ写真機を携帯するツーリストが一気に増加したのである。

「短期間に、数え切れないほどの眼がステレオスコー

プのふたつの穴に向けられた。その穴はまさに天窓になり、無限の世界へと誘っていたのである」と、1859年、詩人シャルル・ボドレールがいささか皮肉交じりに感嘆したのも無理はなかった。ふたつの視点によるステレオスコープ写真は、簡単に三次元の影像をえることができ、まさに魔法そのものであった。ステレオスコープ写真は、家族がそろって団欒を楽しむ居間の中心に君臨し、娯楽と教養を同時に与えるヴィクトリア朝の価値観をみごとに具現化していたのである。ヨーロッパからアメリカへ飛火し、ステレオスコープの大流行は、ほぼ半世紀の間、世界的に猛威をふるうこととなった。ステレオスコープのヨーロッパ的流行はまずフランスから発生し、すぐに全世界をまきこんだ国際的な一大産業へと飛躍していく。美意識だけにとどまらずに、商業、経済界をも活性化していったのである。

早くも同じ1851年、イギリスで最初のステレオ写真の交換をうながす愛好者クラブが設立され、ドイツ、イタリアへと広がっていき、アメリカへもすぐに伝播していった。イギリスでステレオスコープ写真を産業化した第一人者はウィリアム・イングランドで、ロンドン・ステレオスコープ会社（創業1854年）を経営し、1858年には「常時、ステレオ写真10万枚ご提供できます」という驚異的な数字を誇示する広告を打ち、加えて1854年から1860年までの間に数え切れないほどの「作品」を生み出した。「一家に一台ステレオスコープを」という巧みな惹句で流行をさらに促していった。本ガイドブックは、ピクチャレスクからはじまり写真へと収斂していく視覚的美意識の過渡期を示している点でじつに興味深い。なおステレオ写真とツーリズムの関連については、拙著『オックスフォード古書修行一書物が語るイギリス文化史』（NTT出版、2011年）の第6章を参照されたい。

『W. G. コリングウッドのガイドブック』

W. G. Collingwood, *The Lake Counties* (Frederick Warne, [1902] 1932)

さて、湖水地方を文学的想像力の源泉にした作家たちとその作品群は、イギリス文学の大いなる伝統を形成しているといっても過言ではない。すぐれた児童文学者アーサー・ランサムの子孫をたどるとき、ワーズワス、ラスキン、コリングウッドという系譜がただちに浮き上がってくる。ラスキンは5歳のとき、生まれて初めていわく言い難い体験をした——「それはダー

ウェント湖畔の「修道士の岩山」(Friars' Crag)へ登ったときのことである。岩山のうえから苔むした樹木の根もとの穴を通して、黒っぽい湖水を覗きみたととき、激しい歓喜が走り、畏怖の念と混じりあい、以後、木の根元がからみ合っているのを目にすると、その時のことが想起されてしまうようになった」(『近代画家論 第3巻』)。幼少に覚えた崇高美がラスキンの美意識を形成していった。後年、ラスキンは湖畔の眺望を「ヨーロッパの三大美観のひとつ」と讚美しているが、1900年、ラスキンの記念碑(パロウデール・ストーン)が設置された。その記念碑の文字を書いたのがコリングウッドであった。そしてまさにこの地こそが『ツバメ号とアマゾン号』の舞台になるのである。

ウィリアム・ガーショム・コリングウッド(1854-1932)はオックスフォード大学でラスキンのもとで道路づくりをした学生のひとりであった。ラスキンに私淑してグランドウッドまでやってきてラスキンの死まで、それ以後もこの聖人に全身全霊をもって献身しつづけた。コリングウッド自身の資質もまたラスキンに酷似していて地質学、考古学をこよなく愛し、すぐれた風景画家(『コニストン湖の日没』など)でもあった。そして有名な『書斎のラスキン』を描いた肖像画家でもあった(1880年、ロイヤル・アカデミーへ初出展した)。

また同時に、クレイク溪谷へ北方人が到来した時代を描いた『湖のトリシュタイン』(1895年)の著者でもあり、文筆の分野でも「どの分野のものを書いても一流」であった。師としてあおいだジョン・ラスキンの生涯を描きつづけた伝記(1893年)には当然のことながら師ラスキンと愛する湖水地方が愛情をもって活写されている。ラスキンの詩集など多くの著作を編纂し、死後も大規模なラスキン展を各地で開催した。

地域の歴史的事実を何層にも織り込んで、すぐれた歴史小説のような、史実に重きをおいたコリングウッドの『湖水地方』ガイドブックが他のガイドブックと異なる点は、精密な考古学的データと豊かな情感に裏打ちされたことであろう。

『アーサー・ランサム自伝』(1976年)は、湖水地方という土地が、(コリングウッドとの交渉を通じて)ひとりの文学者をいかに育てていったか、という経緯をじつに雄弁にかたっている。アーサーの少年時代を支配したのは「湖」であった。アーサー少年が遊んだコニストン湖は「冒険心と想像力の豊かな子ども」に、ワーズワスの言う、「魂を形づくるたぐいなきもの」と同時に冒険の「大海原」でもあった。アーサーが7

歳のころ、つまり『ツバメ号とアマゾン号』(そもそも『ツバメ号』はコリングウッドのヨットであった)のロジャーと同年齢のとき、ニブスウェイトに滞在するようになった。以後、湖水地方はランサムの創造的源泉となる——「アーサーの生涯のドラマがはじまった。湖と父に象徴されるふたつの力、あるいは湖と父によって作動するふたつの力の衝突であり、それを彼はみずから芸術を通じて解決することになる」(ヒュー・ブローガン『アーサー・ランサムの生涯』[1984年])。

コリングウッドは湖水地方の考古学に関心をいだき、1887年から地元の考古学協会(Cumberland and Westmoreland Antiquarian and Archaeological Society)に参加し、研究誌(*Transactions*)の編集者になり(1900-20年)、会長もつとめた。また、1903年、湖水地方の美術家たちの協会(the Lakes Artists Society)をたちあげ、自身はまたレディング大学ユニヴァーシティ・カレッジの美術教授の要職にあった(1907-11年)。1902年に出版されたその『湖水地方』はまさに適任者をえたことになる。芸術を深く味わい、教養あふれるこの学者は、スカンジナビア語で詩作にふけたといわれるほどの学識の人であった。

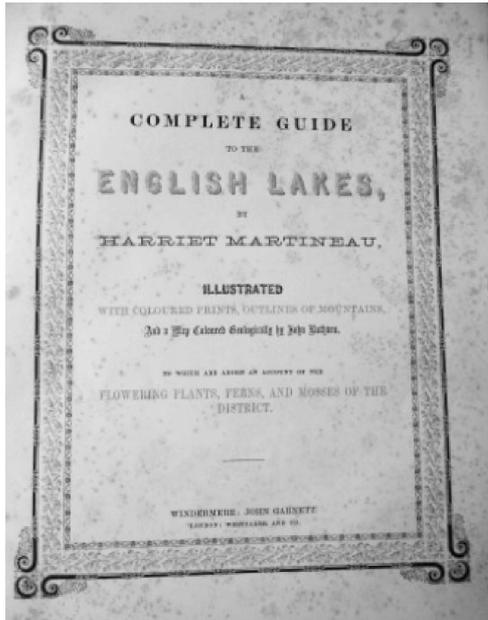
『マーティーノーのガイドブック』

Harriet Martineau, *A Complete Guide to the English Lakes* (John Garnett, [1855] 1858)

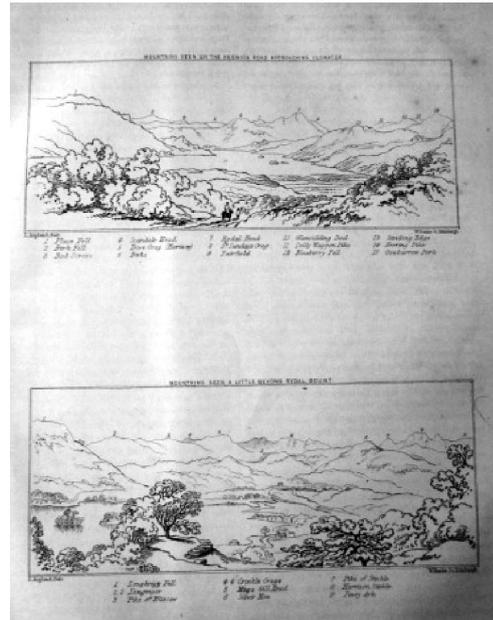
小説家でありジャーナリストであったハリエット・マーティーノー(1802-76)は、詩人ワーズワスの隣人であり、1846年にアンブルサイドに邸宅ノールを建てた。ワーズワス自身の手で、ノール邸の庭に松が二本植えられ、近くに置いた陽時計には、「光よ、われにそそげ」という字句が銘として選ばれた。

アンブルサイド周辺ではマーティーノーは、土地の有名人で、無神論者にしてメスメリズムの信奉者、また2エーカーの土地で実験農業の実践者として、また密猟者を擁護する者として名を馳せていた。こうした脈絡のない数々の行動だが彼女自身のなかでは調和、統一がとれていたのである。

マーティーノーは、ワーズワスが中心となって生じたツーリズムの波を着実にみすえていた。女性文筆家として、他の誰よりも作家として自立するためにはジャーナリズムの渦中に自らを投じ、自己を宣伝する必要性を知悉していたのである。ワーズワス邸の近くにノール邸を建てたのも、ワーズワスに関連した家屋、土地がツーリズムの目的地になり、やがて聖地になってい



図版2 マーティーノー『湖水地方ガイドブック』初版（1855年）のタイトルページ



図版3 マーティーノー『湖水地方ガイドブック』[初版] 挿絵図版

く過程を熟知していたからにはほかならない。1850年、ノール邸は、マーティーノーにとってダブ・コテッジであり、ライダル・マウントであったわけである。現にノール邸には有名人が頻繁に訪れていた。小説家シャーロット・ブロンテはノール邸の客人となり、一週間滞在し詩人マシュー・アーノルドにも遭遇した。1848年にはコンコルドの哲人エマソンもマーティーノーを訪問しノール邸に投泊している。

マーティーノーは1855年に『湖水地方ガイドブック』を書くが、1876年までに5版を重ねるほど好評であった。[図版2] さらに湖水地方の名声を高め、アメリカ人観光客を呼び寄せるために「アンブルサイドの一年」(『ユニオン・マガジン』[1850年])、「英国湖水地方の賢人たち」(『アンランテック・マンズリー』[1861年])など多くの湖水地方の紹介記事を発表した。ワーズワスの声望を利用しつつ、マーティーノーは、「女性」作家として自立の一助としていかに完璧な家庭生活を営んでいるかを見せる必要があったわけである。ノール邸はまさに文学、生活の実践の場であった。

アンブルサイドの土地に1845年冬から1846年にかけて建てたノール邸は、イタリア風ヴィラを模して1840年代にロンドン郊外に増殖したミドルクラスの家屋を即座に連想させるものであった。それは湖水地方独自のアルカディアの古典主義的伝統を、伸長してきた新しいミドルクラスへ適合させようとする試みでもあった。換言すれば、湖水地方の手つかずの自然を、人間が生活をおくる人為的な自然へと変える試みでも

あった。マーティーノーにはワーズワスのように、消失していく自然風景へ挽歌をそぞろもよおすような情感はいっさいない。つまりノール邸は、マーティーノーがこれまで究めてきた社会学的理解にもとづいた自然観の表出であったわけである。[図版3]

この特異なガイドブックを理解するために作者の経歴をここで一瞥しておこう。ユグノ教徒のミドルクラスの家系に生まれたハリエット・マーティーノーは、15歳のとき、耳が聞こえなくなり、やがて味覚、嗅覚障害もわずらうようになってしまう。男女の区別なく均等に教育は与えられるべきであると信じる父親トマスの考えにしたがい、ハリエットは、ドイツ語、フランス語、古典、歴史、修辞学、文学を修得していき経済学、政治学に興味をもち、社会問題への目配りを忘れなかった。とりわけ書く技能にすぐれていたハリエットは、生涯70冊以上の本を著し英米の有力な雑誌に数百篇以上の論考を発表した。恐るべき筆力をそなえて『デイリー・ニューズ』紙の社説だけでも1600篇以上書きあげている。最初に発表した論文(“Female Writers on Practical Divinity,” *Monthly Repository*, 1821)が同時代の宗教的思想家ハナ・モアの女性教育論をあつかっているのが、その後の長くつづく作家生活の索引を示唆しているようで興味深い。社会における人間の諸相に多大な関心をもち、おのずとドイツ哲学、フランス、イギリスの社会主義へ傾倒していった。文学ではオースティン、バニヤン、ミルトン、シェークスピアそしてゲーテをことのほか愛好した。

マーティナーが理想をもって期待していたアメリカの現実（1834-36年）は、奴隷制度があり、女性が隷属する社会でしかなかった。社会が個人に幸福をあたえ、それを促進、深化できるか、否かという指標が、マーティナーのこうした哲理の根幹にあった。結果、「アメリカの文明はみずから掲げた原則にまで及んでいない」と判明したのである（『アメリカ社会 第3巻』[1837年]）。民主主義の中心をなすのは、平等と正義であるというのがマーティナーのゆるがない信念でもあった。

湖水地方のガイドブックを書きながら、女性問題にまつわるフェミニズム論がマーティナーの脳裏には去来していた。『中近東紀行文』(*Eastern Life: Present and Past*, 1848), 『アイルランド論集』(*Letters from Ireland*, 1852, *Endowed Schools of Ireland*, 1859)などのなかに十全に検討されている。女性の結婚、離婚、投票権、看護法などをはじめ、工場法、伝染病法など社会に表出した時事問題についてもマーティナーは議論を重ねたが、その一端がガイドブックに表明されているのは言うまでもないであろう。

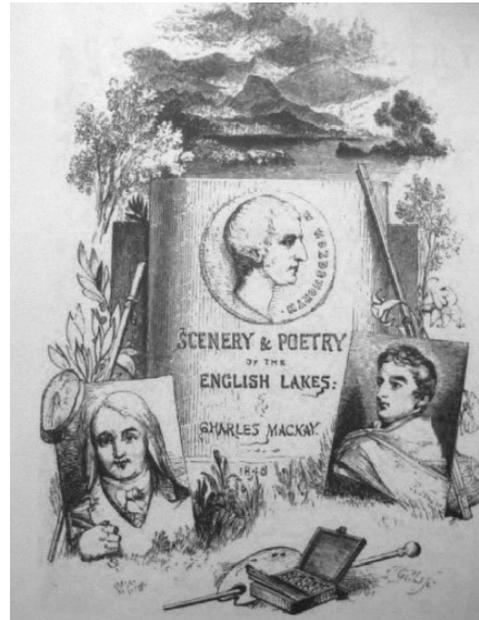
『リントンのガイドブック』

Elizabeth Lynn Linton, *The Lake Country* (Smith Elder, 1864)

ヴィクトリア朝の女性ジャーナリストとして、マーティナーにもおとらないほどの声望を保持していたエリザ・リン・リントン（1822-98）の『湖水地方』は、いわば反＝ガイドブックである。その「序文」には、グリーン、ウェストたちがかつて誇張、歪曲した湖水地方の像はあくまでも過剰なロマン主義が生んだ夢想的産物にすぎず、その後反動として書かれたガイドブックも街道の情報だけを盛りこんだ有用さのみを強調するような実用書になっていると嘆いている。

リントンはそうした欠を埋めるため、当地に永年住みつけてきた住人の知見を注入し「ありのまま」の湖水地方をあらわそうとしたのが本書であると、著者の意図を明らかにしている。よって本書は湖水地方探索の書でもなければ旅行の利便性を盛りこんだ案内書でもない。ましてや決して学術論文などではないと強調している。

あるがままの湖水地方のすがたを、地勢と歴史を文章、木版画を駆使して十全なかたちで伝えようとする本書は、まさに「愛情で書かれた本」と呼ぶのにふさわしく、湖水地方の住民が身をもって感じた体験、健

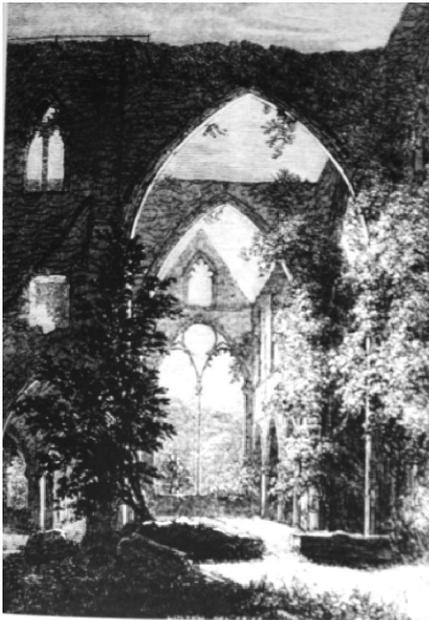


図版4 C. マッケイ『湖水地方の風景と詩歌』（1846年）タイトルページ

全な遊びをわかちあいたい、と「序文」は結ばれている。

ここで湖水地方ガイドブックにかならず挿入されている図版について見ておきたい。1846年に出版されたチャールズ・マッケイ（1814-89）の『湖水地方の風景と詩歌』（*The Scenery and Poetry of the English Lakes. A Summer Ramble*）のタイトルページ〔図版4〕には、ツーリストがこの地に求めているものを巧みに集約している。ワーズワス、コールリッジ、サウジーの湖水派詩人の灵感の源泉であり、絵画の題材にふさわしい自然をたたえた風光明媚な土地であることを、トマス・ビューイックの『イソップ寓話集』（1823）製作を助力し、1840年代にもっとも人気のあった木版画家ウィリアム・ハーヴェイ（1796-1866）の版画は伝えている。

ここにみられるように、ガイドブックに挿入される図版挿絵ではビューイック流の木版画が復興をはたしていた。銅版、鉄版にない素朴な質感が田園風景を描きだすのにふさわしいとみなされたからである。銅版画にみられる「派手さ」（showiness）が退けられて、朴訥で飾らないビューイックの作風が主流を占めるようになっていった。「ビューイックの作風は簡素にして美しい。けっしてこれ見よがしな派手さはない。なぜならば自然がまさにそうであるからだ」（ウィリアム・ハウITT『イングランドの田園生活』[1838年]）。そしてビューイックの「つけ材と彫刻刀が我ものになれば」（「ふたりの盗賊」）と誰よりもその詩想を希っ



図版5 W. J. リントン「ティンターン・アベイ」
『ナショナル』創刊号，フロンティス
ピース（1839年）

たのはワーズワスにほかならない。

さて、リントンのガイドブックは、夫ウィリアム・ジェームズ・リントン（1812-97）との共同作品であった。版画家であったウィリアムは、詩人・版画家ブレイクがそうであったように急進主義者であった。1839年、リントンは『ナショナル』誌〔図版5〕を発売し、労働者の啓蒙に資そうとした。1845年には『イリュミネイテッド・マガジン』の編集者になり、1852年3月から55年4月にかけて、湖水地方のブラウトウッドで急進主義を標榜する「過激な」雑誌『イングリッシュ・パブリック』を発行しつづけた。

リントンはこの機関誌のなかで、国民のための政治の必要性を説き、民主主義的ユートピアのあり方をさぐっていた。リントンの説くユートピア的国家とは、全成人による投票による立法主権を打ち立て、国民投票で法を決めるといふ国家像にあった。そして教育が国家体制の基本ととらえ、全国民に教育の機会を与え、宇宙における自然と神の真理を教示しようとした。そのため、地質学、植物学は必修科目であり課外学習としてガーデニングを付加した。

版画家リントンは少なくとも自らの主義、主張のために湖水地方をふたつの観点から考えていた。まず、湖水地方に住むワーズワスたちの湖水派詩人はいずれも急進主義的な社会変革の必要性を説いていた。二番目の理由として湖水地方はスコットランドに近接し、ジャコバン党の蜂起以来、たえずイギリスに対して急

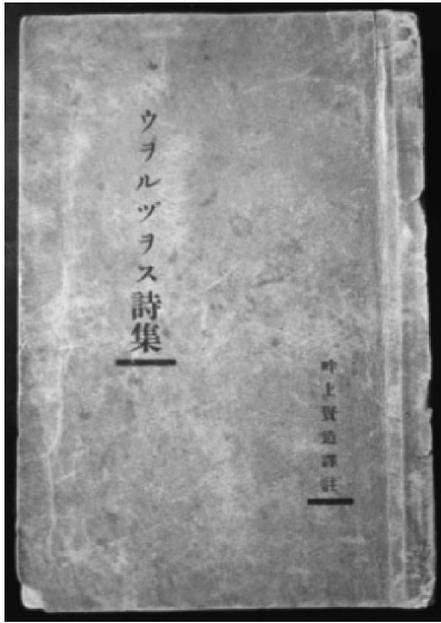
進的思想をふきこんでいた歴史的事実に注目する。詩人ロバート・バーンズ、警世家トマス・カーライルたちはたえず変革の声をあげていた。また社会主義者ロバート・オーエン（1771-1858）は貧困階級のための共産社会の建設を提案し、協同組合運動を推進して、1833-34年、「全国労働者連合」を成立させた。つまりスコットランドの低地地域こそまさにその拠点となっていたのである。リントンの『ガイドブック』にはそうした急進思想が封じ込められているのであった。木版図版のダイナミックな構図、雄勁な自然描写はまさにその証しにほかならない。

最後に木版画と出版メディアの関係についてふれておこう。木版画による挿絵の流行は感性への影響だけに限定されなかった。安価で印刷に供給しやすいという実利性ゆえに、1820年代から30年代にかけて雑誌、新聞へ多大な貢献をはたした。大衆読者は「ひと目で」生起している出来事を理解できるようになるであろう、と『イラストレイテッド・ロンドン・ニュース』の第1号（1842年5月14日号）の「発刊の辞」が声高に主張したのはまさにメディアにおける視覚革命が起きようとしていたのである。

そして1860年代初頭、写真による図版が出版メディアのなかに登場しだしたことを特筆しておかねばならないであろう。さらに1880年代になると、写真から木版をおこしていた過程を踏まらずに写真が直接に紙面へ導入されるようになり、それは「木版の死」を意味したのであった（クレメント・ショーター「視覚化されたジャーナリズム その過去と未来」『コンテンポラリー・レビュー』[1899年]）。

VIII 日本における湖水地方

さて、ここで湖水地方が日本の文学界、英文学研究へ及ぼした影響について付言しておこう。現代でこそ湖水地方は日本人観光客が殺到する名勝地として認知されているが、その湖畔を見ることさえかなわなかった明治の頃、湖水地方は今日以上に想像力を揺さぶる喚起力に富んでいた。それはワーズワスの影響と並行していたからである。たとえば大正時代に広く読まれた、内村鑑三の高弟、畔上賢造が編んだワーズワス譯詩集の「諸言」をみれば詩人の位置がよく理解できる——「英国十九世紀初頭の詩人キルヤム・ウォルツラスが代表的作品長短取りまじへて五十七篇を訳し、之に解説、註解を加下手ものが本書である。必ずしも我文壇の軽浮低劣を概して茲に詩聖の偉大なる思想と高



図版6 畔上堅造譯述『ウォルツマス詩集』
(大正4年), 表紙

貴なる精神とを傳へるものではない。ただ斯くの如き世にありて尚ほ且誠敬虔の生涯を営まんとし、之より来る各種の苦難悲痛のために歩み悩める少数者に、詩聖が天来の靈感を傳へて聊か慰藉激励の資たらしめんとしてである。ゆえに本書の期待するところは少数の真摯なる読者の繙読である」(『ウォルツマス詩集』[聖書研究社、大正4年])というように、きわめて高い文学的な位置を与えられている。[図版6] ワーズワスを詩聖と仰ぐ見方はすでに早くも明治時代からはじまっていたのである。

國木田獨歩

たとえば国民新聞社に入社しようとする24歳になった國木田獨歩は明治27年(1894)にワーズワスに対して全身全霊をもって傾倒していた――

6月27日 嗚呼見よ蒼空の蒼々を。白雲の漠々を。水光山色の翠、これ夏日の美に非ずや。元越山上に雲霧の白光を見よ。嗚呼自然！これ空言に非ず。静かにウォーズワースの句を唱せんことを希ふ。曰く、

Why should we thus, with an untoward mind,
And in the weakness of humanity,
From natural wisdom turn our heart away,
To natural comfort shut our eyes and ears,
And feeding on disquiet, thus disturb

The calm of nature wish our nestles thoughts

然り、これ実に哲人の深慨幽懐する処のもの、嗚呼吾何を求め、何を追う。生命の動機にかられて行く先きは何処ぞや。

嗚呼此の玄妙不思議の天地、吾茲に在りて何を求め何を追うぞ。曰く何を追究するぞ。静かに小兒の赤心を披いて此の自然に対せよ。凡て染入の衣を脱して此の自然に対せよ。悠々として此の自然に対せよ。黙々として此の自然に対せよ。神何処にある一美何処にある。天地の大道何処にある。將に清き心の人は神を見む。千古の神言は吾を欺かず。

美在り、大道存す。ただ心の清くて眼の明かならぬを嘆ず。否否、これ愚なり。ただ心を虚にして自然を見よ。(『欺かざる之記』)

国民新聞の編集者になる前の獨歩が胸中を吐露した一節であるが、「吾茲に在りて何を求め何を追うぞ」と煩悶した青年たちの精神的な導師となったのは他ならないワーズワスであった。ワーズワスの『逍遙』の暗唱から生れる感慨は獨歩のみならず文学青年の多くに共通する心情でもあった。だからワーズワスを通じて、若き文学者たちは湖水地方を魂の聖地とみなしたのも当然の帰結であった。湖水地方は精神を慰撫する土地としてだけではなく文学までを涵養する土地として機能しはじめたのである。

宮崎湖処子

宮崎湖処子に浪漫主義を大いに助長した『帰省』という佳作があるが、湖処子みずからの筆になる宣伝文を見ると、「田園趣味の眞を傳ふる」ゆえに読者から支持を得たとある。

是れ此ヲルツマスの記者が、四年以前に著したる眇然たる一冊子なり。渠が之を著はすや、大経営あるにあらず、大希望あるにあらず、唯其の経過し見聞せし所を叙して、以て江湖に質したるに過ぎず。然して其の一たび出て、我か讀詩社會の之を寵するに十版を以てし、其の一萬部以上を歓迎して猶ほ盡きざる所以のものは、聊か田園趣味の眞を傳ふるに由らずんばあらず。今日以後、苟も田園生涯を愛するの讀者あらば、歸省は永く其の好伴侶たるべき也。(拾貳文豪第4巻『ヲルツマス』[明治26年、民友社])

湖処子はわが国初期のワーズワス紹介者の一人でのみ

ならず、湖水地方を知悉していた文学者であった。湖水地方が懐胎する土地の精をじつに正確に把握していることにわれわれは驚かされるのである。

其の威儀表彰の爲に山の高さを求むる時は、湖國の山より高さもの何ぞ限らむ。其形容躰面の爲に幽なる湖を求むる時は、湖國の湖より幽なるもの亦何ぞ限らむ。然れども山の高さが為に積雪氷魂到る處人間を杜絶せば、威儀崇峻なりと雖、如何か爲さむ、湖の幽なるが故に千山萬壑人間と遠絶せば、形容壯麗なりと雖亦何爲れぞ、一面には山高からざるべからず、高からざれば人を興起すると能はず、湖も亦幽ならざる可らず、幽ならざれば人を感化するを能はず、然して一面には其人と相雜らむとを欲す、是れ自然詩人が自然に對する最元最後の要求にして、然してカムバーランド、エストモアランド、ランカシヤイアー等湖國湖山の徳義的表象の、如何に此の要求に應ずるかを見よ。(同上)

この観察はワーズワスの詩篇からのみ培われたものではない。湖処子はワーズワスが書いた反=ガイドブックともいえる『湖水地方案内』をも熟読していたのである——

ワルツワルスは其の「湖上案内」に於て記して曰く、「我が湖山の地之を瑞西に比する時は固より小なり。故に崇高の意味をして單に土地の容積、及び之より生ずる氣象の影響にのみ歸せしめば、兩者初より同日の論に非ず。然れども我が山中に來りて、山の頭能く虚空に聳え、其巔能く行雲を去留せしむるに足るを見るものは、謂ゆる崇高の意、徒らに山の高下に由るのみにあらず、寧ろ多く山の威儀表象にあるを、及び山の高三千尺に及ぶものは、亦能く氣象の、最も著しき度に於て創生力、壯嚴力、軟和力を有するとを認めん」と。(同上)

巧みな訳筆に感嘆するのだが、湖処子は湖水を取り巻く丘陵や山並みをどれくらいの高さがると考えていたのであろうか。おそらくわが国の高山と比較して、かなり高いと想像していたのではあるまいか。だが、つぎの記述をみると、ワーズワスの忠実な翻訳ではなく、自己の主観を多分に傾注した叙述へと変化しているのに気づかされるのである。

一轉して湖水に移らしめよ、渠は曰く「崇高は自然か示す皮相の象のみ。細視すれば、個々の景色を配合し

たる全觀に於て、自然は示すに美の觀を以てせんとするもの、如し。是等湖水の縁を一遍すれば、愈此理の誤らざるを知る、看よ湖水の明鏡の如き懷を開けば、四山の峰より列なり下る岩石塊、悉く皆湖心に入り、或るものは舟の如く、或るものは埠頭の如く、或るものは島嶼の如く、或るものは依然岩の如く、皆相須つて趣を爲せり。湖に注ぐ小なる泉あり、大なる泉あり、小なる泉、雨なき時に於て、其音なき流、殆ど見れども見ると能はず。其静波の上に旋れる渦も、亦細くして指すべからざるが如きも。然かも其平素潜かに貯蓄する所の砂礫、人知れず堆積して、雨潦の日洪水を回轉せしむ。大なる泉は、蛟龍の走るが如く、湖上の平面を經過し、下に亦蛟龍の臥するが如き砂礫堆、紆餘として線を作しつゝ、大胆にも對岸より突き出たる長岬と相對す。(同上)

この一節はまるで湖水地方を歩いているかのごとく心境を呼び起こす。宮崎湖処子によって湖水地方は日本人の意識のなかに詩的情感を発露させる文学的トポスへと化したのである。

IX 文学巡礼

明治以降、湖水地方がさらに想像力に働きかけたのは昭和初期であった。イギリスはもはや夢見るだけの土地ではなく、とくに英文学研究を志す者には足でその地を踏みしめなければならない国へと変貌していたのである。イギリス文学研究も紹介の域を超えて、文学作品が書かれた背景を訪れ、両者の関係を考究しようとした。いわゆる文学巡礼が盛んになりだし、湖水地方がその聖地となったのである。

ただ興味深いのは、湖水地方の精髓を最初に紹介したのは英文学者ではなく、国文学者であった。のちの万葉集学者になる高木市之助であった。

併し、私が今こゝで語らなければならぬ事は、実はそれ等の景観ではなかった。景観は確かに心ゆくまで私の眼を喜ばせはしたが、それ以前、そしてそれ以上に、私を喜ばせたものは別にある。それはこうして巖頭にたゞずむ私の頬に、というよりもむしろ私の魂に、そよそよと触れる Breeze であった。それはそよ風でも涼風でも、微風でもない、正にブリーズであり、而かもワーズワスがプレリユードの劈頭に、

Oh there is blessing in this gentle breeze,
A visitant that while it fans my cheek

Doth seem half-conscious of the joy it brings
 From the green fields, and from you azure sky,
 Whate'er its mission, the soft breeze can come
 To none more grateful than to me;
 [あゝ、このやさしいブリーズのありがたさ！
 この訪客は、私の頬を撫でながら、
 緑野から、又かなた碧空から
 歓喜をもたらすということを
 自分でも半ば気がつかないようだ。
 何はとまれ、誰よりも私には
 このやはらかなブリーズがありがたい]

と呼びかけている。彼のブリーズであった。実をいえば、愛酒家が、食膳の佳肴を忘れて杯中の酒を味ふにいそがしいように、私も亦、このブリーズを満喫するに忙しくて、いさゝか眼前の美景を忘れた形であった。〔湖畔〕

もはや湖水地方は眼を歎ばせるだけの景勝地ではなく、魂を涵養する場になっていたのである。筆者の魂に吹き寄せる風は「そよ風でも涼風でも、微風でもない」ワーズワスが歌う「正にブリーズ」そのものであったのである。高木市之助は風土と文学作品を関連させた、すぐれた文学研究を後年に残すことになるが、そうした研究態度の萌芽をすでにここにみとめることができよう。

濱林生之助

昭和初年には多くの英文学者が自らのロマン派研究を推進する目的で湖水地方へ向かった。多くの留学報告書が書かれ、湖水地方についても多くの見聞記、訪問録が書かれたが、小樽高等商業学校教授、濱林生之助の『英國文学巡礼』（健文社、昭和5年）はそのなかでも出色の研究書である。

英文学者が英国へ留学し、研究生活を送るのも珍しいことではなくなっていた当時、日本から英国へ移動する手段として船便を使っているが、英国内での交通手段は自動車が主流であった。注目すべきはツーリズムに文学巡礼が組み入れられている点である。「この頃英国では自動車の普及と共に名所巡りが非常な勢いで流行して来た」と濱林自身が「はしがき」にしているように、自動車によるツーリズムが隆盛をきわめ、何度目かの流行として文学巡礼が活況を呈していた時代であった。

濱林は文学的聖地を訪ねる旅を留学の主目的にして

いた。その真意はどこにあるのであろうか。生之助自身の興味深い証言がここにあるので耳を傾けてみよう——「元来英語の熟達は勿論困難な事だが、それは一つは教授の方法にも依るものだ。懸命に単語を習い構文を習って何年も経ち乍ら余り効果の現れぬのは何故だろう。其処を見て来るのさ。之は或いは英語の背景（バック）と言うものを持たぬ為では無かろうか。其のバックだ。私は其れを英国で見て来て後から来る諸君の為に一生の事業として本を書き度いと思っている。題も決まっている。『英語と英国』と言うのだ。日本には此の種の物が殆ど無いと言っている。之の準備に行くと言うのが当たっていよう。要するに向こうでなくては得られぬものを得て来るのが目的だと言い得る」（小樽高商新聞『緑丘』昭和2年〔1927年〕1月26日）。

ここには日本で英文学を専攻しようとする者の気持ち痛いほど現れている。イギリス本国に滞在してはじめて経験しうること、つまり文学者の聖地に自らの足で立ち、歌われていることを実体験することこそ、聖地詣の真意であった。東洋の僻地で英語を、英文学を学ぼうとする者が感じる隔靴搔痒のあせりを、文学巡礼という代償行為で解消しようとする営為にすぎないと無視はできない。英文学作品の背景を学べばより作品が理解できるのでは、と生之助は考え自らの目的にし、「一生の事業として」集大成した本書こそ、『英国文学巡礼』であったのである。そして湖水地方こそまさに聖地巡礼を体現する目的地であった。本書を評して「従来文部省留学生の多くは我々の期待を裏切る事屢々であったが、濱林氏の近著は我々英文学界に齎らせる立派な帰朝土産と称するを得る。私は著者濱林氏に対して満腔の謝意を表するものである」（『英語研究』第23巻第11号）とあるが、これは狭い英文学会の仲間内だけの褒め言葉ではない。と言うのも同時期に執筆された湖水地方探訪記にも、「Wordsworthは自然の讚美者であり、子供の讚美者で、幼年時代の讚美者である。幼年時代の彼を育むだ、Cockermouthの平和な自然に接してこそ、実に詩の心に徹することが出来るという感を深くした」（日高只一「英国湖水地方と英文学」『英米文学の背景』〔四条書房、昭和8年〕）と証言されているように、詩作の現場にたたずんでこそ初めて詩心を理解できるというのである。

追記 本稿は、文献復刻集成『ヴィクトリア朝湖水地方案内』（ユーリカ・プレス、2013年2月刊行）の別冊解説に追加、補記をしたものである。